

悪夢下し

眼子

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

最近、夢見が悪い。

そんなある日、腹を下してトイレに起きると、祖父に呼び止められた。

目次

## 悪夢下し

「まだ水害が龍のものだったころ」

夜中に腹を下してトイレに起きると、祖父が自分を部屋に招いて、話し始めた。

「地震が鯰のものだったころ、この辺じゃあ、悪夢は蜘蛛のもんだった。悪夢で頭をやらいした患者は、しまいには蜘蛛の子が腹ワタを食い破って出て行った」

え、ちよつと。なんでそんな怖い話するの。

洒落にならない、面白くない。そう言っても、祖父は「良いから聞け」と強引に続きを聞かせてくる。

「このところ、夢見が悪かったろう」

そうかもしれない。確かに最近、寝苦しくて何度か起きた。

内容は覚えてないが、熱を出したときに見る、大小のイメージが交互に迫ってくるような嫌な感じが残っていた。けど熱を測っても平熱で、体調も言うほど悪くないから病院にも行かなかった。

「おれも昔、夢見が悪いときに腹を下した。それでも、昔だったから、親にはそんなくらのことで熱もねえのに医者なんか行くなつて言われてよ」

聞いている限り自分と症状が同じだったので、祖父の話聞くことにした。

「毎晩毎晩、やな夢を見た。でも昼間はなんともねえから我慢した。いくらか日が経つと、だんだん夢の中の景色が分かってきた。内容を覚えてらいるようになった」

始めは記憶がぼんやりしていたものの、いつも同じ夢を見ているから「またこの夢か」と気づけるようになり、最終的には、迷路の中で、手のひらくらいあるころころした蜘蛛の子が足元をかさかさ駆けまわって、トラツクくらいの大きな親蜘蛛にどすどす追われてんのが分かってきた、なんて言う。理由は分からないが、祖父はとにかく袋小路に追い詰められたらいけないと思ってひたすら逃げ回っていたら

しい。

祖父は既に戦争の世代じゃなかったが、悪夢にうなされていた当時、祖父の祖父は父方も母方も戦死していたそうで、水害が龍のものだったころの話を知っているのは祖父から見ても母方の祖母だけだった。話がややこしくなったが、まあ、親戚の集まりでそのお婆ちゃんに会ったときに、ぼろつと夢見が悪いことを零したという。

「婆ちゃんは聞くや否や血相変えて、おれはその日のうちに医者に連れてかれて、虫下しを飲まされた」

それがそんな時の虫下しだ。

「いやお爺ちゃん、それいつの薬」

「いつのって、そんな時の薬だ」

「お爺ちゃん！」

「急にコーヒーなんか飲めなくなったら、腹でだいぶ蜘蛛が育つてる。飲みな」

手渡されたのは茶色い小瓶に入った丸薬で、セーロガンみたいな、草っぽい丸いかたまりだ。

何十年前に処方された薬なんて飲めるわけない。確実に飲んだらダメなやつだ。祖父は泥水に消毒を入れても飲めるようにはならなるとか、そういうことの道理をちゃんと分かっているタイプだと思っていたが、このオチ。まさかボケてしまったのだろうか。

もう死んでしまったものの、自分の母方の祖母はかなり話が通じないタイプで、彼女の相手をした経験上、老人のこういう話は否定しても終わりがないと経験で分かっていた。だから今回の祖父の話にも適当に頷いて薬の小瓶を受け取る。飲むつもりはなかったが、折角善意でくれたのだからと、気休め程度に枕元に置いて眠りについた。

夜、目が冴えて眠れなくなった。

精神的に酷く不安定になるような事はなかったはずだ。でもなんだか眠れない。しかもその分、日中に猛烈な眠気に襲われて気絶するように意識が落ちる。コーヒーがないとやってられない。なんだ、全然コーヒー飲めるじゃん。

祖父の話はハズレたと思ったが、夜の不眠と日中の眠気は悪化する一方で、そのうちコーヒーも効かなくなつて、どんなに起きていようと思つても抗えず、同僚に医者をお勧められるほどになった。

「コーヒーをやめてください」

いざ医者に行くと、意外な診断結果だった。

カフェイン中毒でホルモンバランスが崩れてるんじゃないかと言われた。

確かに最近は一日5杯は飲んでた。それでもさかのぼつて考えるとそんなはずない。順番がおかしい。夜眠れなくなつて、朝眠いから、コーヒー習慣的に飲みだした。とは訴えてみても、現に今は飲み過ぎだから、しばらくすっぱり飲むのをやめろという話でその日の診断は終了。腑に落ちないまま帰宅した。

腹で蜘蛛が育つてる。

そんなことを言われればストレスにもなるな。

コーヒーは一旦やめた。

それでも眠れない日は何日か続いて、コーヒーが飲みたい衝動に駆られた。すっかり中毒だ。

タバコを吸ったことはないものの、禁煙てこんな感じか。なんていう禁断症状の苦しみを味わっているうちに、そもそも悪夢にうなされていたことは忘れてしまつていたけど、カフェインが抜けて睡眠サイクルが戻ってくると、それは当然再発した。

再発した初日から、起きてからも赤と白のイメージが残っていた。かなり嫌な予感はしてきたが、祖父は薬を飲んだかと押して聞いてくることはなくて、なんとなくそのまま何日か過ごしてしまった。

目が覚めて、遂に自分が夢の中で迷路の中にいると分かってしまった。

今度の休みに精神科に相談してみても分からなければあの薬を飲むしかないだろうか。そんなことを考えながら仕事から帰る途中、腹を下した。そういえば祖父の話を聞いたきっかけも腹を下したことだった。通勤電車にトイレが付いていないことを恨みつつ自宅最寄り駅まで堪えて、電車から降りて公衆トイレに駆け込む。

まにあつた。

社会的尊厳が守られたことに安堵しながら尻を拭いていると、カタン。と音がした。天井の方からだった。換気扇が気圧差か風かで鳴ったのかと思つて上を向いていたから、トイレの個室の薄い壁の上を、何か白っぽいものが伝つて移動してくるのが目に留まった。それが自分の入っている個室の端のところで止まって、女の人と目が合った。どう考えても空間につじつまが合わない。違う、分かった。細い足の付いた青白い丸いもの。蜘蛛の様な物体に、人間の目に似た、楕円形の赤い目が備わっている。

この時点で尻を拭いていたのは幸いだった。それがトイレの後ろの壁側について、自分からはドアの方が距離が近いことも確かだったから、良く考えることも水を流すこともなくズボンのチャックを上げながら個室を出て、全力で走つて帰った。汗だくになった。

これは祖父に話を聞いた方が良い体験だとは感じていたのに、とても疲れたのと家に帰れた安堵から何もする気が起きなくて、その日はシャワーを浴びただけで寝てしまった。

気づけば自分は細長い通路の中にいた。そしてやっぱりトイレで見た『あの目』をした女の人が、白いドレスを着て、手のひらくらいある大ききの、赤い目の蜘蛛を両手で抱えて持っていた。夢の中の出来事だから、はつきりとした形は思い出せない。ただ、見たものが何だったかだけは覚えている。とにかく、白いドレス、の、女の人、が、蜘蛛、を、手に持っていた。そこで後ろが気になって、振り向いたら

行き止まりだったから、目覚ましが鳴る前に飛び起きた。

起きるなり洗面所へ駆けてコップに水を注いで、祖父に貰った丸薬をザラザラ出して、飲み込む。

「お爺ちゃんー！」

祖父はまだ寝ていた。

無理やりにも起こして、虫下しの効果がいつ出るのかとか、あのあとどうなったのかを聞き出そうとした。

「むし……？」

「この前の虫下しの話。続きしてよ、薬飲まされたところで終わってたじゃん」

「虫下しの薬？ そんな話、お前にしたっけか？」

「したじゃん！ なんか夜お腹壊してトイレ起き

あれは、起きてたときの記憶だったっけ？

猛烈に不安になった。

あのとき、夜の何時だった？ あのときお爺ちゃんは、どっから小瓶を出してきた？

「ねえ……ていうかお爺ちゃん、虫下しの薬って、持ってた？」

「知らねえけど」

終わった。

終わった。

終わった。

やばい、どうしよう、飲んじやった。朝六時、朝日が昇る。茶色い小瓶はまだ、手の中にあった。